

フョイエルバッハの会通信 第100号

国際フョイエルバッハ学会研究大会

「将来の哲学と教育学。フョイエルバッハ兄弟ルートヴィヒとフリードリヒの対話」

Philosophie und Pädagogik der Zukunft. Die Brüder Ludwig und Friedrich Feuerbach im Dialog

10. - 13. November 2016 Georgskommende 26

Arbeitsstelle Internationale Feuerbachforschung Institut für Erziehungswissenschaft

DONNERSTAG 10. 11. 2016

16-19 Uhr Workshop der jungen Feuerbachforscher (C 202)

Leitung: Dr. Michael Jeske (Frankfurt) u. Christian Loos (Münster)

1. Schlüter, Stephan (Münster): Der Vormärz zwischen Restauration und Revolution. Friedrich Feuerbachs Grundsätze einer Pädagogik der Zukunft

2. Chaput, Emmanuel M.A. (Montréal): „Emanzipatorische Religiosität“ - Friedrich Feuerbach's Religion of Future as a Critique of Christian Individualismus

3. Loos, Christian (Münster): Der verschwiegene Rousseauismus in Friedrich Feuerbachs pädagogischen Entwurf einer allgemeinen Volksbildung

FREITAG 11. 11. 2016

10.00 Begrüßung

10.15 - 11.00 Eröffnung: Scheier, C.- A. Prof. Dr. (Braunschweig): Der Gottmensch in Knechtsgestalt - Subjekt-Paradigma des 19. Jahrhunderts

Pause

Sektion I: Religion ohne Gott? (Vorsitz: Gonzaga de Souza)

11.15 - 11.45 Andolfi, Ferruccio Prof. Dr. (Parma): Vorahnung einer Religion ohne Gott bei Friedrich Feuerbach.

11.45 - 12.15 Tomasoni, Francesco Prof. Dr. (Vercelli): Die Bestimmung des Menschen und der Teufelsglaube von der Aufklärung bis zu Ludwig und Friedrich Feuerbach

12.15 - 13.00 Diskussion

13.00 - 14.00 Mittag

14.00 - 14.30 Bosakova, Kristina Dr. (Košice): Friedrich Feuerbach im Gespräch mit dem jungen Hegel

14.30 - 14.45 Diskussion

Pause

Sektion II: Glück und Moral (Vorsitz Andolfi)

15.00 - 15.30 Verissimo Serrão, Adriana Prof. Dr. (Lissabon): Ludwig und Friedrich Feuerbach über Egoismus

15.30 - 16.00 Reitemeyer, Ursula Prof. apl. Dr. M.A. (Münster): Das Recht des Menschen, sein Glück zu suchen. Ludwig und Friedrich Feuerbach im Kampf gegen den christlichen Staat

16.00 - 16.30 Diskussion

Pause

Sektion III: Zukunft als Programm (Vorsitz: Overhoff)

17.00 - 17.30 Briese, Olaf PD Dr. (Berlin): Die Religion der Zukunft und ihre revolutionäre Konsequenz. Theodor Althaus als Religionstheoretiker und Revolutionspublizist“.

17.30 - 18.00 Chappé, Raphaël Dr. (Paris): The Concept of Future in the Key Writings of the Brothers Ludwig and Friedrich Feuerbach during the Pre-March.

18.00 - 18.30 Diskussion

SAMSTAG 12. 11. 2016

Sektion IV: Bildung im Vormärz (Vorsitz: Tomasoni, Briese)

10.00 - 10.30 Brügggen, Friedhelm Prof. apl. Dr. (Münster): Vormärz und Neuhumanismus

10.30 - 11.00 Bykova, Marina Prof. Dr. (Raleigh, USA): The Brothers Feuerbach and the Humanistic Tradition of Bildung

11.30 - 12.00 Diskussion

Mittag

13.30 - 14.00 Overhoff, Jürgen Prof. Dr. (Münster): Die Kritik des preußischen Lehrerbildners Adolph Diesterweg am bayerischen Schulwesen im Vormärz

14.00 - 14.30 Schneider, Katharina Grete, Jun. Prof. Dr. (Paderborn): Friedrich Feuerbach im Kontext pädagogischer Diskurse

14.30- 15.00 Diskussion

Pause

Sektion V: Der Vormärz und das Erbe der Aufklärung (Vorsitz: Brüggem)

15.30 - 16.00 Waszek, Norbert Prof. Dr. (Paris): Das Christentum als „Schwärmerei“. Friedrich Feuerbachs Verwendung eines Kampfbegriffs der Aufklärung

16.00 - 16.30 Durand, Anne Dr. (Paris): Aufklärung und Volksbildung

16.00 - 16.30 Diskussion

Pause

17 - 17.30 Jeske, Michael Dr. (Frankfurt): Emanzipatorische Pädagogik. Friedrich Feuerbach über Perfektibilität und Erziehung.

17.30-17.45 Diskussion

SONNTAG 13. 11. 2016

10-12 Verabschiedung und Abschlusdiskussion

翻訳：フリードリヒ・フォイエルバッハ『将来の宗教』

柴田隆行

上記国際フォイエルバッハ学会大会ではフォイエルバッハの弟フリードリヒ (Friedrich Feuerbach, 1806-80)の著作がテキストとして取り上げられるのに因み、フリードリヒの主著 2 点のうち、『将来の宗教』(Friedrich Feuerbach, *Die Religion der Zukunft*. Zürich und Winterthur 1843.)を翻訳する。全文 59 頁の比較的小著である。2 点のうちもう 1 点は『思考と事実 人間の幸福の最も重要な条件を理解するために』(Gedanken und Thatsachen. Ein Beitrag zur Verständigung über die wichtigsten Bedingungen des Menschenwohles. Hamburg 1862)これは小さな字で 106 頁ある。

本書は「兄カール・ヴィルヘルム・フォイエルバッハを偲んで」という献辞が冒頭に掲げられているが、フリードリヒは五男、哲学者ルートヴィヒ(1804-72)は四男で、カールは次男(1800-34)、長男はアンゼラム(1798-1851)、三男はエドアルト(1803-43)である。

ルートヴィヒの『キリスト教の本質』初版は 1841 年刊、『将来の哲学の根本問題』は 1843 年刊であり、本書は兄ルートヴィヒの名著の書名を踏襲したと思われる。内容はかなり荒削りの激しいものだが、ルートヴィヒの教職追放や著作の検閲発禁等が続いた時代を反映するだけでなく、とりわけ本書が捧げられている兄カールの早世がキリスト教教会権力と結託した国家検閲の犠牲に依るものと思われたことが背景にあるのだろう。フリードリヒに比べると哲学者ルートヴィヒは我慢強い論理的思考の持ち主であったと感じられる。

序文

以下の紙片や章題への誤解を予め防ぐために表明しておくが、著者が宗教ということで理解しているのは、人間幸福の真の根本条件について全人類を貫き規定する内的心情となった知見にほかならない。宗教論は著者にとって人間幸福論である。

したがって、将来の宗教を論じる際に問うべきは、人間幸福の根本条件を将来どこに設定するかである。

この小著はこの問いの答えを持っており、著者は、偏見に囚われない読者が、ここに示した根本命題への賛同を拒まないだろうとの確かな希望に生きている。

ところで、著者がこれらの紙片を公刊する気になったのは、こうした希望だけではなく、差し迫る義務感がそうさせたのである。

著者自身に多年にわたり不動の平和を与えていることがら、他者においてもそうした平和を基礎づけるかもしれない。こうした考えのなかにも、自分の信仰を公に語るようにという要請が著者には十分存在する。ところで、著者がこの信仰を自分の信仰と呼ぶのは、自分がその信仰によって完全に貫徹されていると感じており、それを知っている限りにおいてのみ、である。それは、個人の頭のなかに「将来の宗教」が案出されなかったからだというのではない！ これは、時代の成熟した子であり、歴史の事実であり、善悪を知る木の完全に時代的な果実である。この木は、自らの永遠の根を人間本質という大地に持っているのである。

I.

過去――いまなお信心深い全キリスト教徒も過去に属する――は、自らの信仰において神の名のもとで、人格的・自己意識的な全能の本質を崇拜した。この本質の唯一の着眼点は、その本質を人格的にひたすら崇拜するよう人間を教育することだとされる。この本質は、聖書の報告によれば、さまざまな奇蹟、そのなかではキリストにおいてその本質が人間となることが最大の奇蹟だが、そうした奇蹟によって啓示されたとされる。そして、すべてのキリスト教信仰告白によれば、キリストは現代に至るまであらゆる時代に多様な奇蹟のしるしを、人間との人格的交流によって与えたとされる。だが、聖書は、歴史的ならびに哲学的研究という法官席の前では、インド人のヴェーダやペルシア人のゼント・アヴェスタ、トルコ人のコーランと同じように、人間的で自然的な起原の明白な痕跡を良く身につけ、したがってまた、超自然的で欺きえない作品評価はいっさい要求しえないものとして自らを証した。しかし、それ以外の、人間に対する神の聖書外的で直接的な人格的な作用に関しては、もちろんそれについて非常に多くのことが全キリスト教信仰告白の敬虔な文献のなかで説明されてはいるが、それらはすべて、聖書の奇蹟とまさに同様に、理性が吟味する目の前で霧消する。それらは結局つねに、意図的な虚偽か、あるいはまた、敬虔な夢想家の想像のなかでのみ生じる現象として認識される。したがって、このような神のいわゆる啓示のすべては、確固とした保証なしに存在する。

II.

神の人間化やキリストの奇蹟、依然として続く人間生活への神の人格的介入といったことに対するキリスト教信仰の根底にあるのは、人間との人格的関係のうちにあるとされ自分の人格への崇拜を人間に期待する神が、感性に入り、否定できない人格的な仕方ですらを啓示しなければならないという、もちろん理性的な要求である。この要求そのものは、しかし、こうした人格神否認の萌芽を内包している。というのも、この要求に従えば、神はかつて感性に入り否定できない人格的な仕方ですらを啓示したということについての確かな証言がじっさい存在しないがゆえに神はまったく現存しない、と私は当然推論することが許されるからである。

III.

人間は、その人格的で自己意識的な意志を感じとり、当然容易に次のように仮定する。すなわち、このような人格的で自己意識的な意志が、たとえば雷や嵐、地震のように必然的に強力な印象を自らに与える偉大な自然諸現象の根底にあるにちがいない、と。人間は、こうした諸現象に依存しその現存に脅かされていると感ずる。こうしてじっさい人間に、これらの現象の原因だとして前提されるかの人格的意志への依存感情が生じる。このような依存感情とともに、だが当然同時に、彼らが表象するこの人格的で強力な神を良き友人として持ちたいとの願望が生じる。私は神性とどうやって友だちになれるのだろうか？ 神への依存感情から、すなわち、ほんとうのところ自然から生じるこの疑問のうちに、神性と人間とを仲介したいと思う聖職者、犠牲、寺院、一言で言えば、個々の礼拝の起原がある。こうして幸福衝動が、あらゆる敬虔な倒錯において主役を演じる。そこで最初から主張されるのは、幸福衝動が倒錯のなかで道に迷うなら、必然的にその目的も誤る

にちがいない、ということである。じっさい現実もそうになっている。人格神への信仰へと幸福衝動が迷い込んだら、その帰結は、人間は自らの真実の、現実に自分の意のままになる、幸福と健康の諸条件を、空想の善の犠牲にすることである。そして、このことは、たんに歴史のなかでのみ確証されるのが見られるだけでなく、さらに深く、人間の自然本性に、人格神信仰、とくにキリスト教信仰の自然本性に基礎づけられる。

IV.

歴史からわかることは、神学的表象のために、いわゆる世俗の地上的目的のためよりも無限に多くの血が流され、無限に多くの人間生活が犠牲にされたことである。古代ガリア人やスキタイ人、ギリシア人、ローマ人、ヘブライ人、フェニキア人のように、古代の数えきれない民族で人間の犠牲は礼拝に属した。こうして数百万の人間が、聖職者の手によって彼らの神々のために、最も固有で最も自然的な感性において、犠牲となった。そして、礼拝での人間犠牲の廃止は——ついでに言えば——間違ってキリスト教徒にのみ与えられた名誉である。というのも、ローマ人やギリシア人においては、彼らの文献から容易に立証しうるように、キリスト教の発生より数百年も前からすでに人間犠牲は廃止され、彼らは芸術と学問によってその原始的な粗野から教養民族の段階へと高められていたからである。——さらに、キリスト教の時代以来神学的意見や教会の目的のために、自由意志であろうと強制であろうと、自分たちのいのちを失った数百万の人びとを考えよ。ローマ皇帝によるキリスト教徒の迫害、キリスト教の最初の数世紀にすでにキリスト教宗派間で行われた血みどろの争い、これによって数百年行われた聖地奪還のための十字軍遠征、いわゆる魔女や魔法使いあるいは異端者として審問の火炙りの薪の山でいのちを切り刻んだ無数の人びと、フランスで6万人を下らないプロテスタント殺害の印となった聖バーソロミューの虐殺(Pariser Bluthochzeit)、プロテスタントとカトリックとのあいだの三十年戦争を考えよ。こんにちでもなおカトリック信仰ゆえにイギリスによってひどく抑圧され日々飢餓に苦しんでいるアイルランド民衆を考えよ。さらに、多くの敬虔なキリスト教心酔者の自由意志による自己無力化や、病気や未婚の結果いのちを消耗し短縮させている尼僧や修道士を考えよ。もっとある！ 血といのち以上に犠牲とすべき高貴なものはないのか？ キリスト教会、とくに福音教会は、真のキリスト者という名を求める人からいったい何を要求するのか？ 自立的に思考し自分自身の法則に基づく精神や自分の自由意志の恒常的な犠牲をである。聖書に書かれていることだけが真実だ、と教会は彼に言う。君は君の信仰と思考を聖書の文字通りの内容に従わせなければならない。君は思考する際に直接対象に係わってはならない。君は、この対象の本質は何かと問うてはならない。そうではなく、私がこの対象に関わり思うことの何が神と聖書に適っているかを問わねばならない。君は自由意志を持つことも許されない。君はあらゆる君の行為において、何が理性的であり、自分と他人の幸福に関して何が役に立ち目的に合致するだろうかと問う必要はない。そうではなく、人間の知恵とは異なる知恵を持つ愛する神にとって何がふさわしいか、聖書で神が言うことは、聖職者の口を通して、法外な助言と振る舞いを通して、神は何を君に禁じ何を許し何をなすかである。——もろもろの要求は、それがじっさいに深刻な印象を与える場合、もはやキリスト教の時代ではなく、覚醒した人間的な国家公民的意識の時代である現代では、当然ながら、道徳的に不具にされ情意と精神を病んだ奴隷根性を教えることができるだけであり、そうした要求が、不自然と非人間性の場合と違わず、人口の少なからぬ部分を精神病院に送っているのである。

こうして、人間犠牲はこんにちでもなお数知れずキリスト教の神に捧げられている。それとも、自分の理性や、自分の自由な、理性的で真に人間的なものだけを指針として認める意志を断念する人、馬鹿げた奴隷が、人間という名を受けるにふさわしいというのか？

V.

キリスト教は思考する精神の犠牲を要求する、という非難に対する多くの神学者の反論は、キリスト教信仰の範囲内でだけ理性はその権利を放棄すべきであり、それ以外ではど

こでも自由に支配し管理してよい、というものである。だがこれはそれ自体維持し難いし、キリスト教信仰そのものに矛盾している。というのも、この範囲がどこで始まりどこで終わるかを誰が私に厳密に規定しようとし規定できるだろうか？ どうやって？ 私が信心深いキリスト者でありうるとしたら、それは同時に、キリスト教が、人間の使命や教育、婚姻、国家、歴史、自然、一言で言えばあらゆる思考するに値するものに関して私の見解や信条を導き本質的に規定することがなければ、である。さらに、もしキリスト教信仰が、自分の人格的神は遍在であり、至る所にいると言うとして——それを理解しうるとしたら、神はたんに空間的に至る所にいるとか、あるいは、一切合切がこの人格神との精神的関係に適しているという意味でというにすぎないのではないか？ だが、神が後者の意味でも遍在するというのであれば——そしていかなる神学者もこれを否定することを恥じるであろう——、キリスト教信仰の範囲は無制限であり無限であることはまったく明らかである。だがそうだとすると、私は至る所でキリスト者であり、キリスト者として意志し振る舞い思考することも明らかである。したがって、たとえば物理学で、理性と学問のあらゆる反証にも拘わらず、いわゆる神の啓示や聖書では太陽が地球の周りを回転するがゆえに太陽が地球の周りを回転する、と確信しなければならない。それゆえ、上述のように、キリスト教信仰が自立的に思考する精神の継続的犠牲を期待することは文字通り真実である。というのも、キリスト教信仰によれば、キリスト教のまぎれもない印が押されていない思想はいずれも悪魔の密輸品だからである。

歴史においてもわれわれは、多くの神学者による上述の抗弁が論駁されるのを見る。というのも、あらゆる時代にキリスト教信仰は、すべての人間関係、とくに政治的諸関係や家族関係、ならびに知のあらゆる領域を取り押さえ保護監督下に置こうとしたからである。こうしてこんにちでもキリスト教国家では、聖職者の承認なしに検閲を通る書物は、どんな種類のものであろうと、まったくありえない。じっさいこうしてドイツの地にあるわれわれのすぐ近隣でもキリスト教信仰は法や医学の教壇にさえおぼり、好奇心に満ちた若者たちを“キリスト教的国法”や“キリスト教的なゲルマン医学”へと聖別したのである。じっさいこうしてこんにちでもなお、プロテスタントのアカデミーでさえ、神学部が他の諸学部に対する優位を求めるのである。

VI.

幸福衝動は、人間のあらゆる生命、行為、思考の最も強力な原動力である。しかし、人間の幸福には極めて重要な二つの条件がある。一つは、人間は、自分の真に本質的な要求の基にならなければならない自分自身の本質を知っている (kennen) こと。もう一つは、人間は自分自身の本質を愛している こと、である。

VII.

人間の自己知が幸福の第一条件である。ところで、キリスト教は一般にこの知見に好意的ではない。というのも、幸福を可能にする道具つまり理性と同様に、この知見の対象つまり人間一般もキリスト教によって軽蔑的に投棄されるからである。人間理性は、とキリスト教信仰は言う、上から光を与えられないがゆえに、それ自身だけで真理に至ることはできず、まったくなんの役にも立たない。本書の著者は、神学者たちとくにルターによって自然的理性に添えられる最も自尊心をくすぐる名誉称号のいくつかを引き合いに出すことができるかもしれないが、これらの紙片が手に渡るであろう少年少女を考慮して、これを断念する。したがって、われわれの自己知の道具である自然的理性を、キリスト教は最大の軽蔑をもって見下す。だが人間一般もまたキリスト教によってほんとうは思考し研究するに値する対象ではないようにわれわれには見える。「照らされた理性」が語るべきもとである聖書がわれわれに教えるように、アダムがリンゴを嚙って以来、またこのリンゴ嚙りのゆえに、じっさい人間は最も卑しいものよりもさらに価値がなく、生まれながらにして、死後に永劫の火のなかでどろどろにされるにふさわしい。そして、人間は自分の幸福のために人間本質を知る必要はなく、むしろ人間本質の無価値とキリストの血の功績だ

けを信じる必要がある。したがって真に言えることは、アダムがリンゴを嚙ることによって、原罪の教えによってと私は言いたい、人間の自己知に対するあらゆる欲求が損なわれ、また当然その限りで、非常にリアルな災いが引き起こされた、ということである。

VIII.

これまで述べてきたことから明らかなのは、キリスト教信仰は、人間が自らの本質を探究するのを鼓舞するにはまったく向いていないということである。そこで、最初にわれわれが向かうのは人間愛である。だがそうになると、われわれはふたたび人間本質に戻ることになる。われわれは、その実質がどこにあるかを問うだろう。さらに、キリスト教は人間本質の個々の特性いっさいとどう関わるか、またこうしてわれわれを最も根本的に納得させるのだが、われわれの幸福衝動がいかに、キリスト教に満足を求めるのでは自らの目算通りにならないか、という点である。

IX.

人間幸福の第二の条件は、人間が自らを尊重し愛することである。われわれがすでに最初から仮定しうるのは、人間愛は、ひたすらに十全で中断なく存在する程度に力を獲得しなければならない、ということである。人間愛が真実で本質的なものであるべきだとしたら、それはひたすらに十全で中断なく人間本質にのみ関係しなければならない。その根本原則は次のようであるにちがいない。君でも他者でも同様に、なによりも人間を愛せ!だが、キリスト教は何と言うだろうか? 答えは、なによりも神を愛せ、また、君自身のように君の隣人を愛せ!である。私は隣人を、私自身を愛するように、すなわち、私が私自身を愛する程度に愛すべきである。これはともかくも妥当するだろう。だが、その場合次の問題が残る。私は私の中にいったい何を愛すべきか? 私の人間的な自然本性か? ちがう! キリスト教信仰によれば、人間的な自然本性は、私がなによりも愛すべき神の前では、徹頭徹尾のろくでもないもので、神の目の前では身の毛のよだつものである。キリスト教信仰によれば、私は私をただキリスト者としてのみ、すなわち、神の恩寵によって神の正当な尊敬や、人間的な自然本性の下劣さへの信仰も本質的に含まれる正当な信仰に目覚めさせられた人格としてのみ、愛することを許される。したがって、私が君をも愛すべきなのは、人間としてではなく、ほんとうはそれだけがわれわれと親交を結んでいる人間本質のためではない。そうではなく、私は君をキリスト者としてのみ愛すべきであり愛することが許されている。君がキリスト者でなければ、私は君を愛することが許されない。したがって、われわれは、キリスト教的隣人愛では人間本質はまった脇に寄せられているのを見るか、あるいは、頭がちょっと浮上したら直ちにまた棍棒で溝の中にたたき落とされるのを見る。人間本性の下劣さがキリスト教の第三の言葉である。それゆえ当然キリスト教は、わが類〔人類〕の力や華麗さがその全体性と不死性において無限に自己を完成させ数世紀に亘って前進し、数千の人的に偉大な人物において自らを明らかにし依然として明らかにしつつあるという意識を――人間愛をこのように活発化させるわれわれの内なるこの意識をまったく生じないようにさせる。その限りで明らかなことは、キリスト教は隣人愛を人間本質に基づけないだけではなく、私と君との間に、わが共通の自然本性との敵対を意図する第三の人物を割り込ませる、ということである。ただ一つの本質的で真実の、それゆえ真に幸福を与える、隣人愛のきずながある。それはすなわち人間本質そのものである。だが、このきずなは、キリスト教によって承認されないだけではなく極めて暴力的に引き裂かれる。

X.

人間が将来の人間生活の根本原則でなおあるべきか、それとも、人類にはまだ人格的に啓示されたことのない自称人格神がそうであるべきか? さらに、人類はなお神学的神の犠牲になるべきか、それとも、神が最後は人類の至福の犠牲になるべきか? これは現在と今後続く数世紀の大問題である。

XI.

真理を愛する思索家は、自分自身の本質に目を向けて、自分の人間的諸力や素質や衝動を幸福の極めて豊富な源泉として認識し、また、それらを当然、幸福の源泉として、愛するのでなければならない。だが彼はそこに留まることはできない。彼はじっさい、人間本質を自分の人格のなかに見るだけではなく、それが人間社会の全生活において、しかもより豊かにより大規模に、そしてより広範囲に広がり活動するのを見る。彼は、自分が細かな人格的制限や汚点や弱点を掃き清め新たに鍛えた生きる勇氣をもってより自由な空気を吸ってふたたびそこから登場することなしに消えることはできない激流としてこの源泉が噴射するのを見る。真理を愛する思索家は、キリスト者より緊迫して人間愛に向かうのを感じる。キリスト者というのは、自分の人間的自然本性をまさに自分の下劣さと劫罰の根拠と見なし、人間社会をせいぜい天上の目的のために訪れ、だがそれ以外ではそこから逃れるべきであり、また、じっさい人間社会と触れる場合でも、自分に改善ないし解決作用を与えるより以前にそれを支配し懲らしめるのに向いている。なぜなら、キリスト者は子どもの時からわざわざ、人間社会の生活と行為全体に汚物以外の何ものをも見ず、悲惨以外の何ものをも見ないようにし始め、そのように訓練されているからである。

なによりも君自身と同様に他者においても人間本質を真の悪からの真の救い主として、あらゆる人間的幸福の源泉として注目しそれを愛せ！ 人間の外に平安はないのだ！これが思索家の宗教であり、これが将来の宗教となるだろう。

XII.

人間本質に属するのは、人格的で、すなわち身体を貫徹し自己を意識し、思考し、教養と発展の能力のある精神、さらに学問、最後に、霊魂と感官を介して感じる能力、あるいはより単純に表現すれば、感官と感性である。さらにこの最後のものは、男と女で異なる自然本性である。

XIII.

さて、人間の幸福の実質は明らかに次の点にあるだろう。すなわち、人間本質に属するすべての力と素質と衝動は、調和のとれた仕方、すなわち、互いの関係において同等で融和した間柄で、自ら訓練し発展し当然にも満足しようという点にあるだろう。そしてこれが可能なのはただ、人間理性の保護と企図と無条件の支配によるのであり、自分自身の力と素質と傾向性を知っている個々の人間に話しかけてくる理性、人間本質の諸欲求一般、とくに自分自身（教育する人物）の諸欲求を熟知している教育者から自分に作用を及ぼす理性、最後に、自分が生まれ育った法律と国家施設の理性、じっさい人間のために根拠づけられ他の本質のためではないはずであるがゆえに唯一人間的な自然本性を根底に持っているにちがいない理性によってのみである。このことから矛盾することなく明らかになることは、人間幸福が達せられる場としての(in)本質と、手段となる(durch)力は、人間本質そのもの以外のどこにも求められないことであり、個々の人間の行為や信条の真に唯一の原理、教育と国家の原理は、人間本質以外のものではありえないしあるはずがないこと、である。したがって、国家は、たとえば婚姻に関して、婚姻は解消できないとキリスト教の神は要求するかなどと問う必要はない。そうではなく、婚姻がまったく解消できないことは理性的であるか、人間の福祉に適っているか、とだけ問うことが許される。

こうして、われわれが人間本質に眼差しを向けたとき、われわれは同時に、われわれの幸福がわれわれ自身のエレメントと本質にのみ根拠づけられているという認識に達した。だが、キリスト教は、われわれの幸福を超人間的な人格態つまり神のうちでの生活に基づけようとして、これとはまさに反対のことを言う。

XIV.

これまでの考察で人間のうちにある理性に割り振られたのは、人間諸力すべての調和が

とれた均等の形成と活動についての最上級の見解であった。そこに矛盾が見出されるかもしれない。だがその矛盾は見かけにすぎない。理性はそのことで第一線を明け渡されないし他の諸力に対する利点を明け渡されることもない。そうではなく、理性が一般になしえまた理性だけがなしうるそうした機能や活動、すなわち、注目し、管理し、保護し、考量するなどといったことだけがまさに理性に認められる。理性も人間本質の諸力に属する。理性も仕事をする権利を与えられ、そして理性の仕事はまさに注目し、管理し、保護し、比較する等以外のことではないし、また、理性が他の諸力に作用を及ぼす時には、当然ながら秩序づけ規則的に——それ以外はありえない——作用すること以外ではない。理性もまた一般に、人間本質のすべての力が一致して活動すべきである場合には他の諸力に作用しなければならない。というのも、さまざまな力の一致の実質は、互いに並行してではなく、互いに手を取り合い相互に貫徹し合って活動することだからである。

理性は、すでに多くの人が語ったように、内的人間の目である。目が見て、目が自分に帰せられる唯一のこの機能を行使することで、目は優先的に導き修正しつつ他の感官に作用する。だが、目はそれゆえに他の感官を侵害して支配するという事はない。まさにそのように理性は他の諸力に関わる。理性の支配は愛の支配である。

XV.

人間幸福が打ち立てられるべき最も堅固で安定した地盤は人間本質そのもの以外ではありえない。私にとってブドウの木の成長が気がかりならば、私はとりわけその木の自然の要求を知らなければならないし、こう言ってよければ、木の意志をもつばら考慮しなければならない。同じことが人間にも通用する。諸君が人間を幸福にしたいと思うならば、人間本質の意志にもつばら意見を聞き、神の意志を巻き込まないこと。神の意志の啓示については、人類史において、理性の前ではまったく何の痕跡も知見も存在しないからであり、周知のように、あまりにしばしば、美化された名前として人間僭主の恣意に奉仕しなければならないのであったのである。人間にとってなによりも神聖であるべき意志、人間が最もへりくだって身をかがめるべき意志、真に神的な意志は、人間の意志にほかならない。

XVI.

キリスト教は人間の足元から人間独自の本質の地盤を奪い取る。だからキリスト者は、つねに二つのエレメントの間に生き、地と天の間を漂う人物である。したがって、彼が創作し行うことは、必然的に、二義的で恣意的であり、自分自身に矛盾し、二つの椅子に座り、災いをもたらす性格を持たねばならない。

地球の引力が物理的（身体的）なものにとってあるのと同じことが、人間本質が全人類にとって存在する。それはわがエレメントであり、われわれはこれによってのみ幸福になることができる。その上や下にあるものあるいはあるべきものは、災いによる。家畜同然の粗野にも、超人間的な英国的生活や本質にも、人間幸福は存在しない。それは、諸個人のもつばら現実的な人間的な欲求のうちに——感性の欲求ももちろんこれに属する——発生し、人間社会の福祉と一致する生活に人間幸福は存在する。

人間のみが、存在する。そしてわが神、わが父、わが審判者、わが救い主、わが真の故郷、わが掟、わが国家公民的かつ人倫的生活と努力の核心、わが公的ないし家庭の生活と努力の核心である。またそうであれ。人間以外に平安はない！

XVII.

まさにいま話題にした現実的人間諸欲求のほかに、意図的で想像され習得された欲求、人間の病弱な瞬間に起因する欲求がある。だがこれらは、人間の普遍的欲求だと永遠に烙印づけてはならない。

XVIII.

ところで、キリスト教は人間本質の個々の力のいっさいにどのように関わっているかを

われわれは検証したい。これによってわれわれは、キリスト教がこれら諸力の打ち解けた平和的共鳴すなわち人間の至福を促進するの可否かについて完全に納得するであろう。

思考する精神と自由意志に関して、われわれは第四と第五考察で、これらがキリスト教によって犠牲に供されるという認識に達した。

だが、自由意志の犠牲に関するあらゆる疑念を完全に否定するためにわれわれは次のことを追加する。

キリスト教は次のように教える。あらゆる良き恩恵は上から来る。人間によって生じる良き所業は神の靈感に、悪い所業は悪魔の靈感に由来する、と。キリスト教によれば、私が自分ののろうべき人間的・自然本性に従ってではまったくありえない良き所業が私によって生じるとしたら、それは、神がそれを意志したからであって、私がそれを意志したからではない。というのも、もし私がそれを意志したならば、この良き所業はじっさい私の所業ではないだろうし、キリスト教信仰と完全に矛盾することは神の所業ではないからである。したがって、私が良き所業を非常に頻繁に遂行したとしても、私の意志はまったくそれに関与せず、私は意志なしであり、神のたんなる道具にすぎない。こうしてじっさい、キリスト者が思考と意志において奴隷として産み出されること、真実の無条件で真面目な思考と探究や、美しく高貴な振る舞いや努力を喜ぶ感情がキリスト者から完全に奪われていること、それゆえキリスト教によって、学問や、したがって私が自分の幸福も他人の幸福もそれなしでは産み出すことのできない活動力も、殺がれだけにちがいないこと、が確実になる。

(つづく)

書誌情報

服部健二「『自然の自己意識』としての人間」2016年8月『季報唯物論研究』第136号、pp.94-104

ブラジルの「国際フォイエルバッハ会議年報」(<https://congressofeuerebachanais.wordpress.com/>) ANAIS DO IV CONGRESSO INTERNACIONAL LUDWIG FEUERBACH: ANTROPOLOGIA E ÉTICA Volume 1: Fortaleza: UFC, 2016. いずれの論文もインターネットからダウンロードできる。

01. A VONTADE É LIVRE? NATUREZA E ÉTICA EM LUDWIG FEUERBACH Eduardo F. Chagas
02. PHILOSOPHIE DER ZUKUNFT ODER EINE ZUKUNFT OHNE PHILOSOPHIE? LUDWIG FEUERBACHS PRAKTISCHE PHILOSOPHIE IM SPIEGEL DES REVOLUTIONÄREN VORMÄRZ
Ursula Reitemeyer 英文要旨、本文ドイツ語
03. SER E AGIR PARA UMA ARTICULAÇÃO ENTRE ANTROPOLOGIA E ÉTICA EM LUDWIG FEUERBACH
Adriana Verissimo Serrão
04. EUDEMONISMO Y LIBERTAD EN LA FILOSOFÍA MORAL DE LUDWIG FEUERBACH Joaquín Gil Martínez
05. FEUERBACH: FUNDAMENTOS PARA UMA ÉTICA DA SENSIBILIDADE Ana Selva Albinati
06. SENTIDO DA CRÍTICA À RELIGIÃO NO PENSAMENTO DE LUDWIG FEUERBACH Arlei de Espíndola
07. A MORTE COMO CATEGORIA FILOSÓFICA: FINITUDE E DETERMINAÇÃO EM FEUERBACH
Antonio José Lopes Alves
08. A PRESENÇA DE FEUERBACH NOS MANUSCRITOS DE 1844 DE MARX Monica Hallak
09. O CARÁTER ONTOLÓGICO DA FILOSOFIA DE FEUERBACH SEGUNDO LUKÁCS Fátima Maria Nobre Lopes
10. A PRESENÇA DE FEUERBACH NA LÓGICA DA FILOSOFIA DE ERIC WEIL Evanildo Costeski
11. A PEREGRINAÇÃO DO SANTO VIVO E O SER DE DEUS EM FEUERBACH Marcelo João Soares de Oliveira
12. EL CONCEPTO DE RELIGIÓN EN FEUERBACH Angelina Paredes Castellanos
13. O HOMEM NO CONTEXTO DA NOVA FILOSOFIA DE LUDWIG FEUERBACH
Erminio de Sousa Nascimento e Eduardo Ferreira Chagas
14. A ANTROPOLOGIA COMO PANO DE FUNDO PARA A CRIAÇÃO DE DEUS E DAS RELIGIÕES EM LUDWIG

FEUERBACH Antunes Ferreira da Silva e Jéssica de Sousa Lira

15. OS ELEMENTOS SUBJETIVOS FUNDAMENTAIS PARA A EXISTÊNCIA DA RELIGIÃO EM FEUERBACH João Batista Mulato Santos

16. LUDWIG FEUERBACH: PENSAMENTOS SOBRE UMA FILOSOFIA DO FUTURO

Luis Guilherme Stender Machado

17. COMUNIDADE E GÊNERO EM FEUERBACH: DA COMUNIDADE ILUSÓRIA À COMUNIDADE REAL

Jorge Luis Carneiro Lopes

18. A NECESSIDADE DA ENCARNAÇÃO DA FILOSOFIA EM LUDWIG FEUERBACH: UMA ANÁLISE DO ENSAIO “PARA A CRÍTICA DA FILOSOFIA DE HEGEL” Felipe Assunção Martins

19. COMENTÁRIOS ÀS CONTRIBUIÇÕES E LIMITAÇÕES DA CRÍTICA MATERIALISTA DE FEUERBACH AO IDEALISMO DE HEGEL John Karley de Sousa Aquino

20. A RELAÇÃO DEUS E NATUREZA EM LUDWIG FEUERBACH E BENEDICTUS DE SPINOZA

Henrique Lima da Silva

21. PARA UMA INTERPRETAÇÃO CRÍTICA DE FEUERBACH SOBRE SPINOZA E A RELIGIÃO

Carlos Wagner Benevides Gomes

22. SOBRE A IMAGINAÇÃO: UM PARALELO ENTRE O PENSAMENTO DE BENEDICTUS DE SPINOZA E LUDWIG FEUERBACH Valterlan Tomaz Correia

23. AS CONTRIBUIÇÕES FEUERBACHIANAS PARA O DESENVOLVIMENTO DO CONCEITO DE SOCIEDADE CIVIL-BURGUESA EM KARL MARX Amélia Coelho Rodrigues Maciel

24. MARX: ALGOZ DAS MEDIAÇÕES DIALÉTICA Alan Brandão de Moraes

25. ENTRE FEUERBACH, MARX E WEBER: “NA ALEMANHA, A CRÍTICA DA RELIGIÃO ESTÁ TERMINADA”

Paulo Eduardo de Sousa

26. O CONCEITO DE FETICHISMO EM MARX E FEUERBACH Mailson Bruno de Queiroz Carneiro Gonçalves

27. O MATERIALISMO SENSUALISTA DE FEUERBACH Janine Honorato de Aquino

28. LUDWIG FEUERBACH: A ILUSÃO DO HOMEM RELIGIOSO. UM APANHADO INICIAL ENTRE OS PRIMEIROS CAPÍTULOS DA ESSÊNCIA DO CRISTIANISMO E PRINCÍPIOS DA FILOSOFIA DO FUTURO

Rodolfo de Oliveira Alves

29. O AMOR NAS FILOSOFIAS DE ARTHUR SCHOPENHAUER E LUDWIG FEUERBACH

Jheovanne Gamaliel Silva de Abreu e Luédley Raynner de Souza Lira

30. FEUERBACH E GUY DEBORD: ENTRE A IMAGEM E O REAL Inácio José de Araújo da Costa

お知らせ

本「通信」は今回 100 号を迎えました。これを記念して会員の皆さまに原稿募集をしましたが投稿者ゼロでしたのでこの企画はつぶれました。

事務局から

* 本紙は季刊発行です（次号 12 月）。ぜひ情報やお便り等をお寄せ下さい。

* 年会費 500 円。郵便振替 00160-1-84468 「フォイエルバッハの会」。

〈事務局連絡先〉

112-8606 文京区白山 5 丁目 28-20

東洋大学社会学部柴田研究室気付

フォイエルバッハの会

tamast@toyo.jp

<http://www2.toyo.ac.jp/~stein/fb.html>